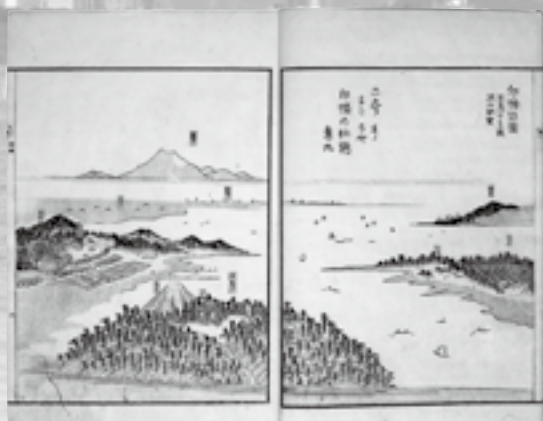
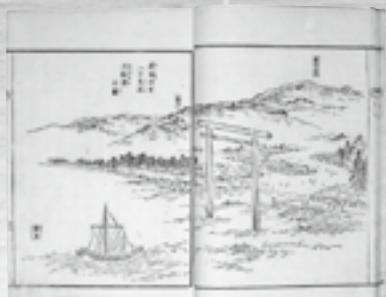




【写真2】
息洲明神と筑波山



【写真1】
印旛沼図 筑波山眺望



【写真3】
鹿島神宮 大船津の図

利根川図志にみる とねがわすし

鹿島・香取・筑波山

本書は、江戸時代後期、下総国布川(北相馬郡利根町布川)の医者赤松宗旦が著した利根川沿岸地域の地誌書、全6巻です。宗旦自身が認めた序文には、安政2(1855)年と明記されていますが、この時点で全巻は完成されていないことが、事実上の出版は安政4年ごろと考えられています。

宗旦がこの本を書き始めたのは、安政元(1854)年ごろで、最初は利根川の源流から計画したようですが、上利根川の方はあとで執筆することにして、中利根川以下、今の古河市鳥喰あたりから筆を起しています。中利根川、下利根川の沿岸、および両川に流れこむ手賀沼、印旛沼など、地名やその付近の神社仏閣、名所旧跡、山川、橋、渡し、池沼などを項目として、産業・交通・地理・歴史から伝説・自然現象・動植物の生態にいたるまで触れた幅広い地誌で、川の流れに沿って、利根川河口の銚子までを書き記しています。なお、本書が図志と言われるのは、本文だけでなく80枚を超える多数の挿絵や絵図が収められているからで、いまでは消えてしまった江戸時代の庶民の風俗や生活の場を伝える貴重な書籍と言えます。

『利根川図志』に表わされた世界は、特に下利根川にいたると利根川流域沿岸にとどまらず、霞ヶ浦をも視野に入れたものとなります。

江戸時代初期に幕府によって付け替えられた利根川中・下流域は、それ以前には霞ヶ浦や北浦などともつながり、複雑に広がる大きな内海(入江)だったようです。この内海をめぐる世界に、鹿島、香取、筑波山があります。

『利根川図志』をみると、下総国花島山(千葉県印旛郡印旛村平賀あたり、写真1)から、また常陸国息洲明神(神栖市息栖、写真2)など利根川流域沿岸から眺望する筑波山の姿が描かれています。いずれも、男性、女性の筑波山二峰が印旛沼や利根川、霞ヶ浦越しの遙かなたに遠望された姿を現しています。また、「鹿島神宮一の鳥居 大船津の図(写真3)や「香取神宮 津の宮河岸」などは、利根川や北浦の岸辺に立つ壮大な神宮の大鳥居が描かれていて、水運と深いかわりを持つ両神宮の性格をあらわしています。『利根川図志』が描く筑波山の眺望や鹿島・香取両神宮の大鳥居の威容は、いずれも古代から続く内海の景観や名峰筑波山の姿をほうふつさせるものと言えます。

この資料は、市立博物館で12月13日(日)までは1階展示室2の企画展「古代の筑波山信仰―内海をめぐる祭祀の源流―」で、その後27日(日)までは2階展示室3で展示していますので、ぜひご覧ください。

市立博物館 ☎824・2928